

土器に残された「なおす技・こわす技」

遺跡から出土した土器を観察していると、いろいろな技の痕跡が見られることがあります。

写真①は、上花畔1遺跡（緑苑台東）から出土した約5千年前の縄文時代前半期の土器です。縦方向に入った割れ目の左右に、直径0.5cmほどの「あな」があります。これは、製作途中ではなく、完成後の土器にあげられたものです。なぜ、硬い土器に「あな」をあけたのでしょうか。

それは、ひび割れを補修するためです。紐を通して縛ることで割れ目をしっかりと固定したと考えられます。よく観察すると、「あな」の中に紐状のものが残っている部分があります。この土器のように、紐状のものが残されて発見されるのは珍しいことです。土器に見られる「なおす技」からは、数千年前の人々が壊れたものを丁寧に補修して使用していたことが分かります。

「なおす技」の一方で、土器に「こわす技」が見られることもあります。

写真②は、若生C遺跡（若生）から出土した6世紀～7世紀前半頃の続縄文時代末葉の土器です。この土器の底を見ると、中央部に直径5cmほどの「あな」を打ち抜いています。この土器は墓地で見つかりました。ここでは、ほかにも同じ時期の土器が、墓とその近くから出土し、多くは底の部分を打ち抜いています。本来はモノを入れて使う土器を、底を打ち抜いて副葬品にすることは、葬送での非日常的な行為の一端を示しているのかもしれない。

「なおす技」と「こわす技」。対称的ですが、どちらも土器が大事なものであったことを、時を超えて現代の私たちに伝えてくれます。

（荒山千恵）



写真① 縄文土器／上花畔1遺跡出土
（高さ27cm／約5000年前）

点線で囲んでいるのが「あな」の位置。
割れ目の左右に、2孔1対を上下2カ所で補修。



写真② 続縄文時代末葉の土器／
若生C遺跡出土

（高さ31cm／6世紀～7世紀前半頃）

写真右は土器の底を上にして撮影。
底の中央が打ち抜かれて「あな」があく。

※写真①②は縮尺不同



石狩市学芸員
荒山千恵 Chie Arayama

専門分野は考古学。北海道での遺跡発掘調査をはじめ、出土した木の道具、音の考古学などの研究を行う。

国文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ☎62・3711

ERIS 「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ (<http://www.i-eris.tv/>) でもご覧いただけます。